

EUROPEAN MOBILITY WEEK

16-22 SEPTEMBER 2024

Mix & Move!



#MobilityWeek



杉並区公式 HP



ヨーロッパモビリティウィーク HP



9月
September
16-22

環境交通啓発週間(9/16-22)です！

まちでの移動、都市交通を切り口に、地球環境やまちづくり、福祉など幅広いテーマについて、市民と行政が一緒になって考える環境交通啓発週間(9/16-22)のことです。

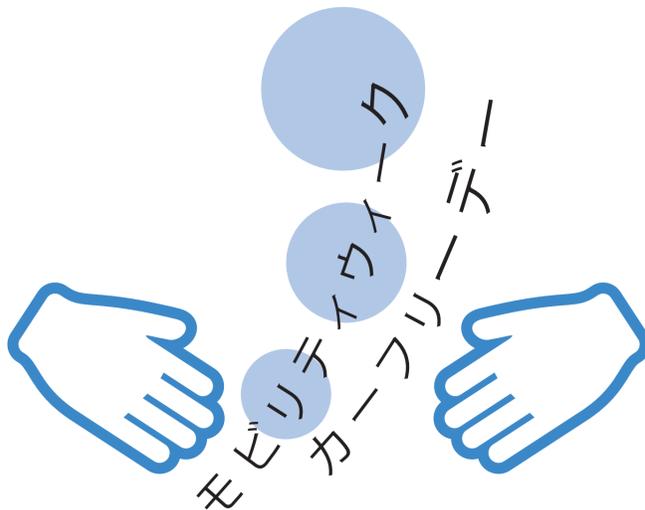
欧州委員会(環境総局)のプロジェクトで、2002年より実施され、近年、世界約3000都市が毎年参加しています。

この活動を通じ、持続可能な都市交通・まちづくりに向けた、①市民への啓発と②自治体の政策推進の双方を目指しています。啓発にとどまらず、これを機にハード・ソフトともに自治体の政策展開まで行われている点が特徴で、持続可能な都市交通の政策推進にむけた有効な手立てとして活用されています。

人と環境にやさしい 持続可能な交通まちづくりの実現 交通×土地利用×暮らし

自治体の 交通施策展開

市民への施策周知
新システム・考え方の紹介
新施策のスタート



自治体と市民が
一緒に考えるプラットフォーム

市民への 社会啓発

環境問題
まちづくり
交通 × 文化・歴史資産
福祉・健康
生活の質

European Mobility Week & Car Free Day

ヨーロッパモビリティウィーク&カーフリーデー



モビリティウィークでは、3つの主な移動手段(公共交通、自転車、徒歩)をはじめとし、関連付けられる都市活動について、毎年決められるテーマに従い、日替わりでキャンペーンを実施しています。最終日にはメインイベントとして、カーフリーデー(車のない都市空間を体験し、考える日)があります。この数年は、自転車の利用促進が各都市の重要なテーマとなっています。

2024年のテーマ

Shared Public Space
～みんなで使おう公共空間～

1-2 取り組む課題

EUROPEAN
MOBILITY
WEEK
16-22 SEPTEMBER

移動を見直し、持続可能な社会へ近づけよう！

モビリティウィークでは、交通(移動)を通じて、市民一人一人の暮らしから、地球のことまで幅広い課題を考えます。

特に、自動車の使い方について考えます。自動車は、便利ですが、エネルギーや空間利用の点で非効率な移動手段です。

自動車に過度に依存する社会がもたらす弊害(大気汚染、騒音、健康被害、市街地の空洞化など)を見つめ直し、今後は、持続可能な社会の構築にむけて、それぞれのまちが、必要かつ最適な交通(移動)手段は何か、選択し、各交通手段の優先順位をつけていく必要があります。

課題のイメージ

～持続可能な交通街づくりの実現にむけて～



EUROPEAN
MOBILITY
WEEK 交通×土地利用×暮らし

クルマの問題って
何だろう？

自家用車
の問題を考えます！



2 カーフリーデーとは?

モビリティウィーク最終日(9/22)のメインイベント

車のない都市空間を体験し、車の問題を考えます!

一日、まちの中心部に、車両の通行禁止地区をつくり、車から解放された都市環境の変化(騒音、大気、にぎわいなど)を、市民ひとりひとりが体験します。

公共交通や自転車など他の移動手段が充実していれば、街では車に頼らなくても日常生活には支障がないことを実感することができます。車に過度に頼らない持続可能なまちにするにはどうしたらよいか、まちづくりや地球環境、文化、福祉、生活の質の向上などの視点で考えます。

カーフリーデーは、1997年のラ・ロッシュェル(仏)での「車のない日」にはじまり、翌年には、フランス環境省のイベント、2000年からは、欧州委員会のプロジェクトとなり、現在に至ります。

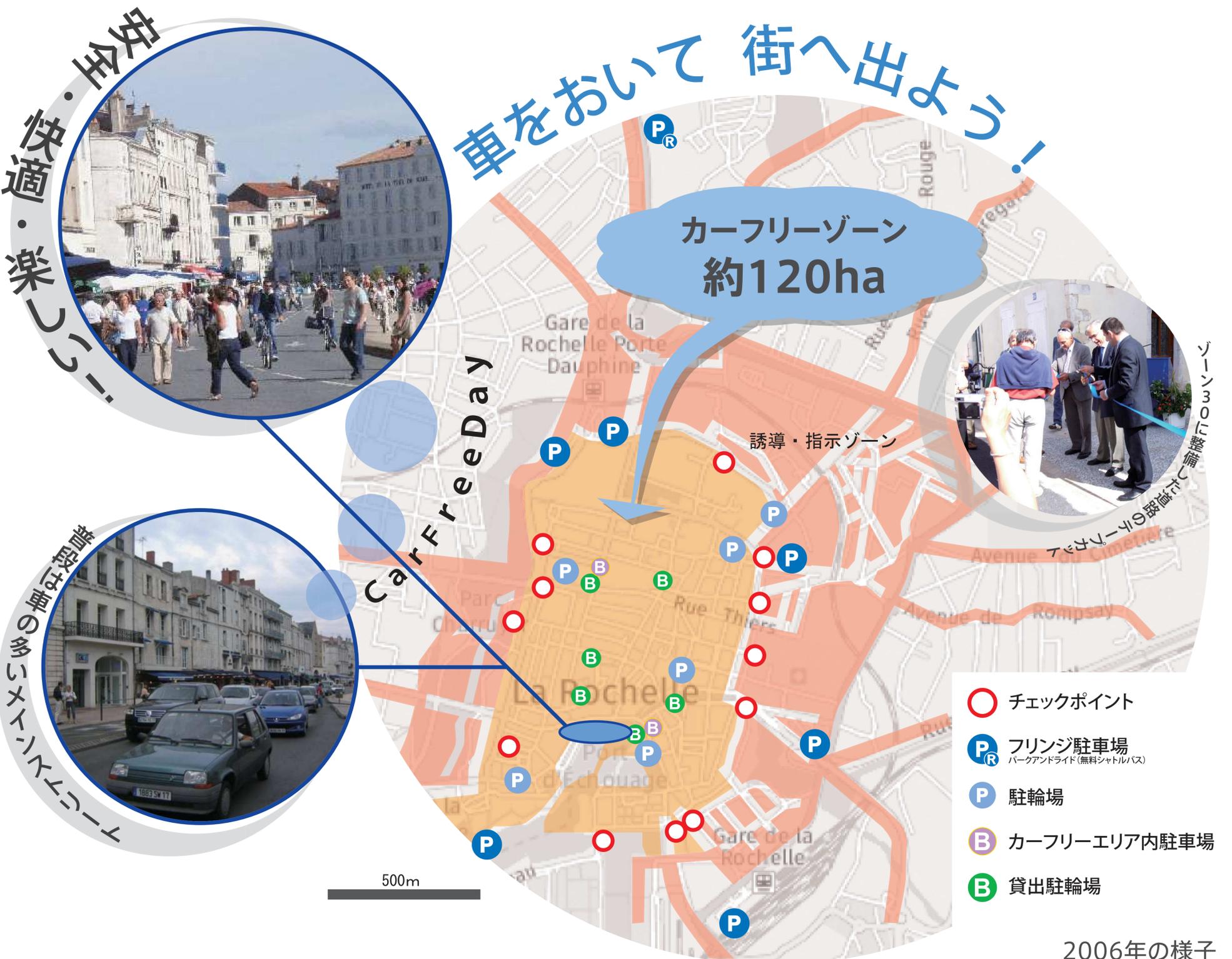
カーフリーデー発祥の地

La Rochelle

ラ・ロッシュェル(フランス)

1997年9月9日、フランスのラ・ロッシュェルで、「車のない日」の社会実験が行われました。ラ・ロッシュェルは、大西洋岸に位置する都市圏人口135,000人の港湾都市で、古くから貿易の拠点、芸術・文化のまちとして栄えています。

その一方で、環境の観点から、様々な都市交通政策を展開し、約30年前から電気自動車の普及させた熱心な環境都市のパイオニアとして広く知られています。ラ・ロッシュェルにおける社会実験の成功が、ヨーロッパモビリティウィーク&カーフリーデーの原点となっています。



2006年の様子

4-1 日本の参加状況

日本の参加は2004年から

日本国内では、2004年の横浜市・松本市・名古屋市の3都市からはじめました。近年では、毎年10都市前後が参加するまでとなりました。地域では、東海、北陸、関西方面の参加が多く、参加形式では、行政・市民団体が半々の割合となっています。

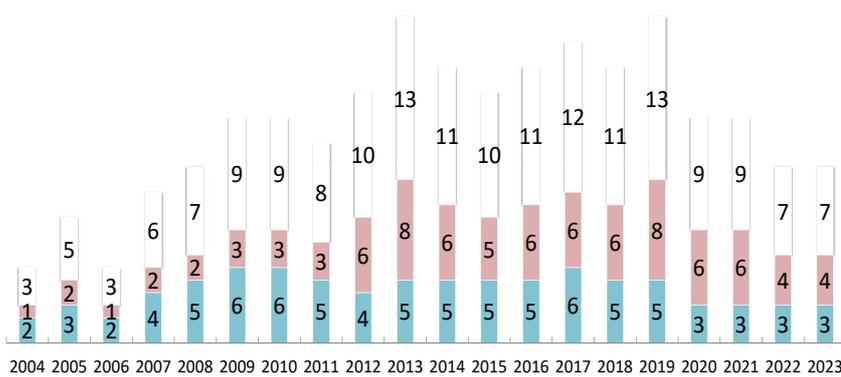
※日本では、市民団体の参加も登録都市として認めています。

まずはカーフリーデーから

日本では、欧州のような自治体の施策展開への活用よりも、まずは、市民の認識を深める市民啓発「カーフリーデー」に重点を置いて始まりました。

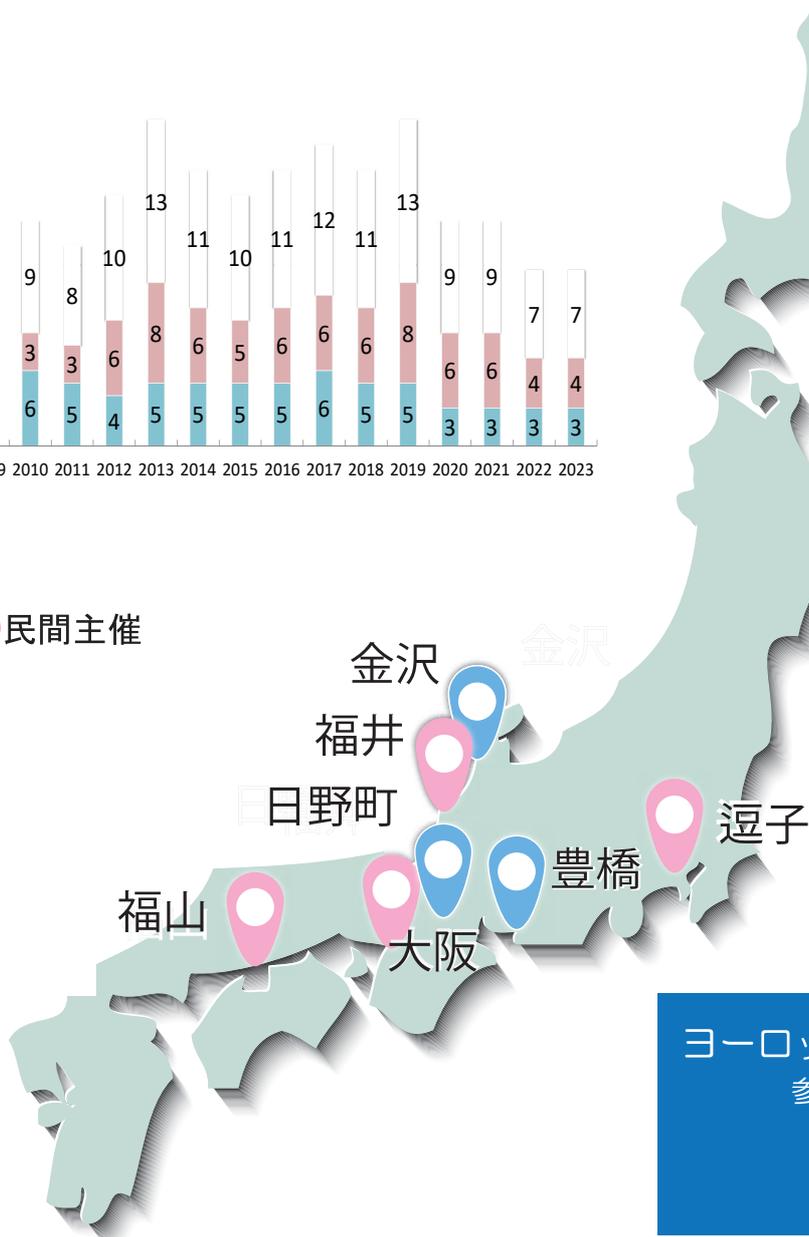
なぜならば、持続可能な人や環境にやさしいまちへの転換には様々な課題がありますが、中でも、クルマ(自家用車)の使い方について、市民一人一人が見直し、過度な依存社会からの脱却について合意していくことが欠かせないからです。

今後は、モビリティウィークを活用した交通施策の展開が期待されます。



実施都市

● 行政主催 ● 民間主催



ヨーロッパモビリティウィーク
参加都市数 (2023)

7都市

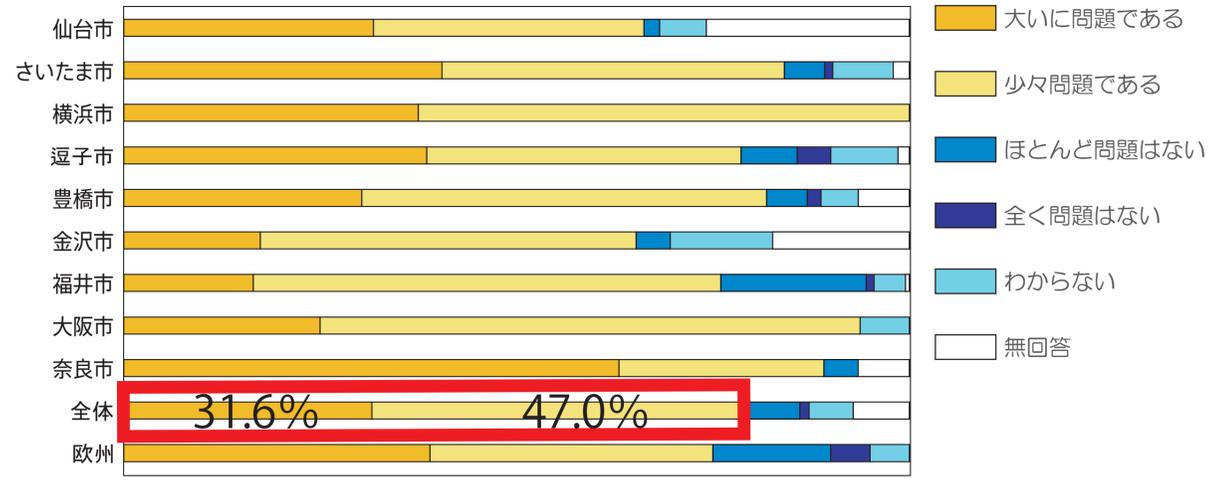
5 市民の意向は？カーフリーデーアンケートより

市民のクルマ優先社会への問題意識は、年々高くなっています。欧州市民との大きな差はありません。

自動車に替わる便利な交通手段や環境が不足していることなどから、やむを得ず自動車を利用している傾向も見られます。

カーフリーデーでは、このような市民一人一人の意識が、地球環境問題、都市内交通の問題、中心市街地の停滞などの改善につながるよう、継続して市民意識をアンケートしていきます。

自動車交通への問題意識は？



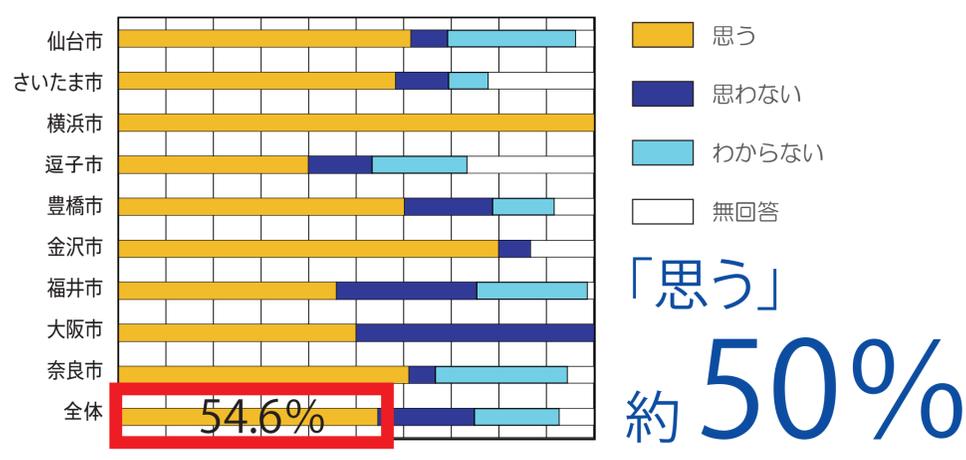
日本では…？
「問題がある」約 **80%**

ヨーロッパでは…？
「問題がある」75%

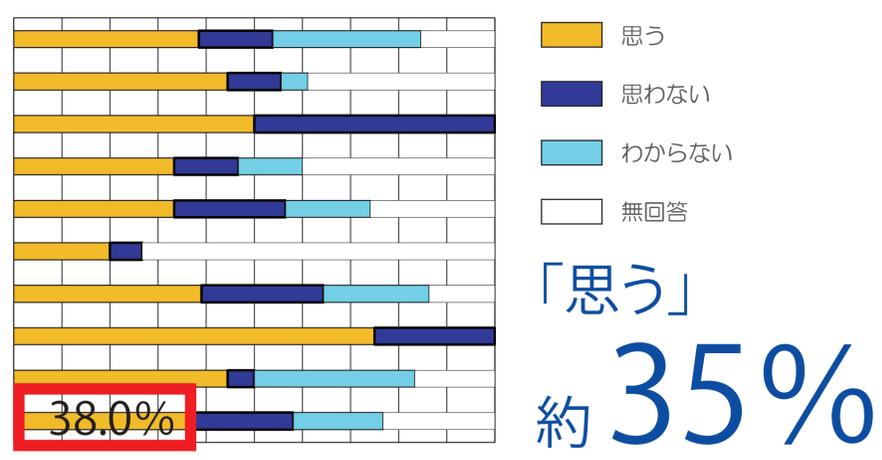
自動車 を 普段利用する人にきいてみました！

公共交通が便利になったら、
自動車から移動手段を
変えてみたいと思いますか？

自転車が便利になったら、
自動車から移動手段を
変えてみたいと思いますか？

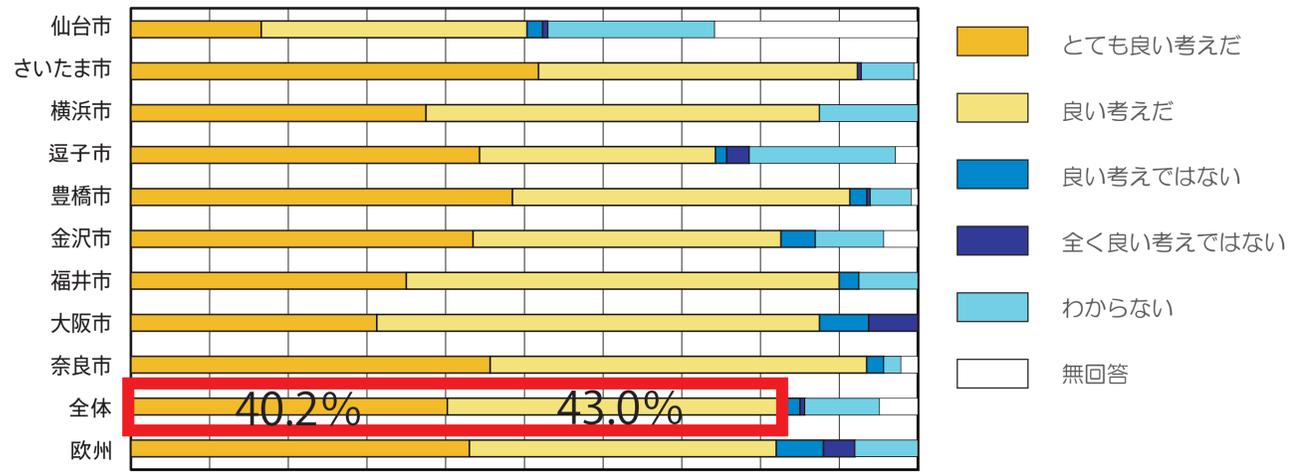


「思う」
約 **50%**



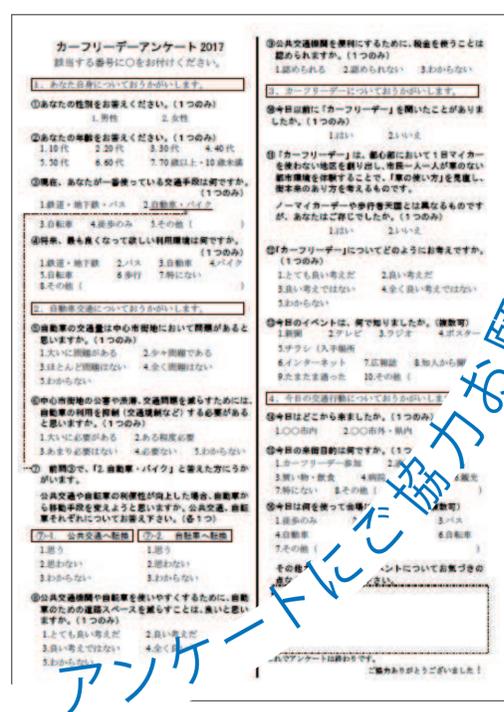
「思う」
約 **35%**

カーフリーデーをどう思いますか？



日本では…？「よい考えだ」約 **83%**

ヨーロッパでは…？ 「よい考えだ」約 **82%**



アンケートにも協力をお願いします！

日本国内：2019年CFDアンケートより
ヨーロッパ：2006年市民アンケートより

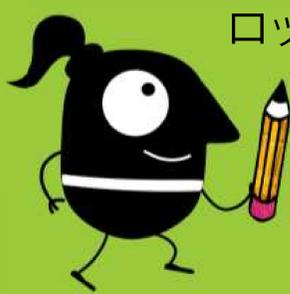
EUROPEAN MOBILITY WEEK

16-22 SEPTEMBER 2020

ヨーロッパモビリティウィーク&カーフリーデー

ロックダウン(新型コロナウイルス感染防止)中に学んだ

より良い都市移動についての10の教訓



1

公共スペースは貴重です。都市は、駐車場や複数の車線を占有する「車」のためにはなく、人々のために経営されることが、これまで以上に重要です。

2

今まで見えにくかった「**エッセンシャルワーカー**」(社会生活の維持に不可欠な仕事に携わる人々)の重要性が高まりました。公共交通機関や移動をサポートする職種が含まれます。輸送能力が限られてしまったため、公共交通を一番必要とする人々を優先することが重要です。しかし、持続可能で安全な都市移動に不可欠な公共交通の信頼を構築する必要もあります。



3

目に見えないものが顕在化されました。日々の交通による大気汚染や騒音は、前例にないレベルまで下がりました。ヨーロッパの人々は、しばらくの間、きれいな空気と騒音の少ない都市空間を享受し、その持続を願いました。私たちは、これをある程度維持するために、何ができるでしょうか？

4



私たちの世界はあまりにもスピードが速すぎました。しかし急ぐ必要はありません。時速30 kmへ速度制限したり、都市部での速度を下げることで、ゆっくりすすみましょう。

5

呼吸器系の健康やアクティブなライフスタイルは今まで以上に重要です。初期の研究では、大気汚染と肥満が、COVID-19による健康リスクを大幅に増加させることを示唆しています。したがって、私たちは、まちで人々が安全に歩いたり、自転車に乗れるように、恒久的により良い方法を見つける必要があります。誰もが健康を維持し、スポーツに励むことに努力するべきです。現に、多くの店でジム用品が売り切れしました。しかし、最高のジムというのは、ウォーキングやサイクリングのようにまったく単純なものです。



6

在宅勤務は、多くの人にとって、一般的、可能なものとなりました。通勤のための交通による渋滞や大気汚染が減っています。同時に、一部の職種の人々は、仕事場に行く必要があります。よって、社会の安全な回復にむけ、雇用主や交通の専門家、プランナーは協力して、解決策を見つけなくてはなりません。

7

こどもの通学において、車での送り迎えは、主要な渋滞要因となっています。そして、徒歩や自転車で通学している他の生徒に危険を感じさせ、彼らの両親もまた、車で送迎することになります。まさに悪循環です！リモートまたはeラーニングは、こうした機会を減らしますが、子供を学校につれていくための、より持続可能な選択肢が必要です。



8

デジタルツールは、交通システムを効率的に利用する鍵ですが、すべての人が使えるものでなければなりません。長年、交通の専門家は、多様な移動手段を利用するライフスタイルを促進するために、MaaS (モビリティ・アズ・ア・サービス) について議論しています。混雑度が低い移動手段に関する情報をリアルタイムで提供したり、バスを乗り継ぐ代わりに徒歩という選択を提示する交通アプリなど。これらのツールを最大限に活用するには、デジタルリテラシーとアクセシビリティも必要です。

9

ネット購入は、ロックダウン中のひとつの解決策でしたが、配達はどうでしたか？ゼロ・エミッション物流を身近にするカーゴバイクの可能性を思い出してください。

10

社会には、ハンディキャップのあるひとたちがいます。バリアフリーの交通システムの都市にしましょう。車椅子の人が利用できる都市は、誰もがアクセスできる都市ということです。

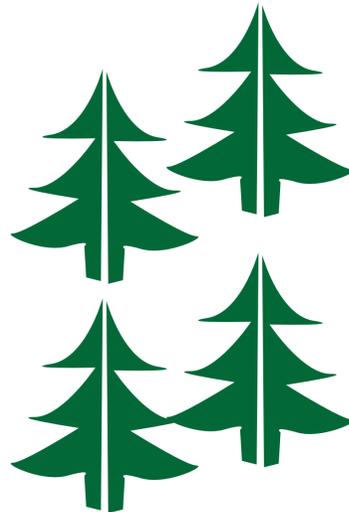


乗り物くらべ ちきゅう編



バスや自転車に乗ると地球にやさしいね!

※大きく成長した杉の木（50年で、高さが約20～30m）は1年間で平均して約14kgのCO2を吸収するとされています。

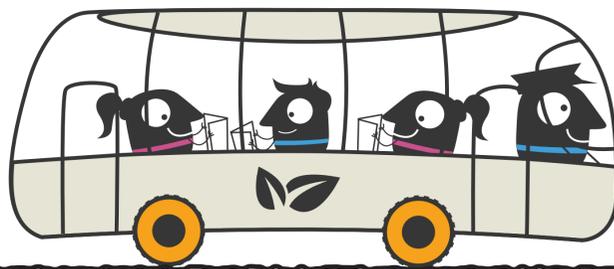


スギ植樹換算

0本

4本

6～7本



二酸化炭素排出量

90 kg

35 kg

0 kg



くるまだと大気汚染や騒音の問題もあるよね

※数値は分かりやすくするため、大まかなものとしています

※70人が移動するとして、車54台（平均乗車人数1.3人）、バス1台、自転車70台で設定した場合です

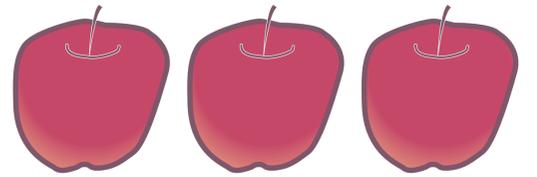
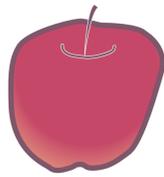
乗り物くらべひと編

健康



バスや自転車に乗ると
ダイエットにいいね!
健康になるし、病院代も少ないよ!

運転できない子どもやお年寄り、
身体の不自由なひと、
バスならでかけられるね



消費カロリー

20 kcal

50 kcal

160 kcal



肥満になる人の割合

30%

20%

20%以下



肥満になると
病気にもなりやすいね

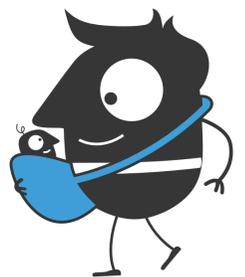
※数値は分かりやすくするため、大まかなものとしています

※60kgの男性が10km移動するとして、車・バス時速30km、自転車時速16kmで算出しています

乗り物くらべ まちなか編



クルマだと、よりみちがしにくいね。
歩いたり自転車なら、
気軽にお店に立ち寄れるね!

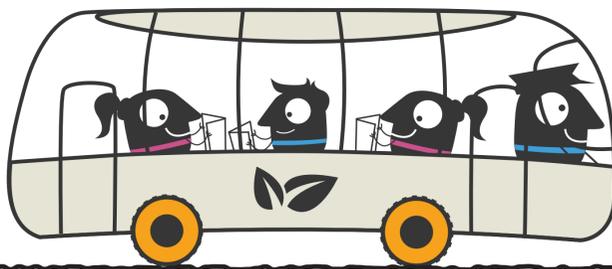


滞在時間

1.5 時間弱

2 時間以上

1.5 時間弱



駐車場面積の比率

18 : 1 : 3



まちなかが駐車場ばかりだと
面白くないよね

※数値は分かりやすくするため、大まかなものとしています

※70人が移動するとして、車54台（平均乗車人数1.3人）、バス1台、自転車70台で設定した場合です